

＜ 長崎の高齢被爆者が語る結言（ゆいごん）
～あのこと子どもだった私が見たくらしと健康～ ＞

研究年度 令和5年度

研究期間 令和4年度～令和6年度

研究代表者名 吉田恵理子

共同研究者名 永峯卓哉

I. はじめに

太平洋戦争末期の1945年8月6日に広島、9日に長崎に原子爆弾（以下、原爆）が投下され、多くの人々が犠牲となった。2023年8月9日、長崎は78年目の原爆の日を迎えた。被爆者手帳を持つ被爆者は、11万3649人、平均年齢は85.01歳（2023年3月末現在）¹⁾となり高齢化により被爆経験を語るができる体験者も減少し体験の風化が懸念されている。

歴史的に経験したネガティブな体験を残し教訓とすることは、次の世代に残された責務である。また自己のネガティブな体験について語ることは、高齢被爆者にとって、被爆体験からの精神的な回復や人生の整理にもつながる。しかし「ほんとうに苦しいことについてひとは話しにくいものだ。なかなか話したくないものだ。忘れてしまいたいということもある。どのように語ってもおいつかないという想いもあるだろう²⁾」と植田が述べているように、語ることの難しさも存在する。

本研究では、被爆当時子どもだった長崎の高齢被爆者が、自らが生きた証として次世代に伝えたい、被爆当時のくらし、健康に対する思いを『結言（ゆいごん）』と定義し、長崎原爆被爆高齢者がインタビュアーである孫世代の看護学生に語る当時のくらし（衣・食・住・健康管理）およびその後の健康観に関するライフストーリーから、長崎原爆被爆高齢者の体験を明らかにすることを目的とした。

本年度は、7名のインタビューの語りの中から長崎原爆被爆者2名の

語りからみた、高齢被爆者が被爆体験を語る意味について報告する。

II. 用語の定義

意味：長崎原爆被爆高齢者A氏の頭の中に表される感覚と定義した。

III. 研究方法

1. 研究参加者

機縁法にて長崎で原爆被爆体験のある長崎原爆被爆高齢者に直接依頼を行い研究参加者とした。また、長崎の被爆・平和活動関連団体（長崎県被爆者手帳友の会、NPO法人アジェンダ NOVA ながさきなど）に調査協力を依頼し、研究参加者を募集した。

2. 調査期間

2023年4月から2023年11月

3. データ収集方法

半構造化面接を実施した。面接では、これまで被爆者の体験の研究や新聞の取材、今回の研究に協力し、学生に被爆体験を語ったことについての印象、感じ、感情について自由に語ってもらった。面接の場所は、研究参加者の希望に副い、参加者の自宅、参加者の指定する公民館などのプライバシーが確保できる場所とした。

面接内容は、研究参加者の許可を得て、ICレコーダに録音した。

4. 分析方法

参加者の語りは、参加者の語りをそのまま書き写す「対話引用方式」を用いて、逐語録を作成した。分析は、Berelson³⁾の内容分析の手法を用いた。具体的には、逐語録を繰り返し熟読し、高齢被爆者が被爆体験を語る意味について語った語りを抜き出し、コードとした。次に、コードを内容の類似性・相違性を検討しながらカテゴリを形成し、形成したカテゴリに対し、内容を反映する命名を行った。

5. 倫理的配慮

研究参加者に、研究目的、研究内容、インタビュー内容、方法、自由意思による研究への参加と辞退、途中辞退による不利益はないこと、研究成

果の公表について文書と口頭で説明し、署名による同意を得た。

面接は、参加者のプライバシーや体調、新型コロナウイルス感染対策を十分に配慮したうえで実施した。

IV. 研究成果

1. 研究参加者のうち分析対象者の概要

分析対象者2名は、80歳代の男性1名、90歳代の男性1名であった。

A氏：86歳、男性。被爆当時9歳。爆心地から1.4キロの畑の納屋のそばで被爆。弟は、折れた柱が腹に突き刺さり、死亡した。長崎原爆の語り部としての活動依頼が幾度となくあったが、断ってきた。被爆体験は、ずっと語ってこなかったが、新聞の取材をきっかけに語りを公表するようになる。元教員。妻を数年前に亡くし、現在独居。

B氏：99歳、男性。被爆当時18歳。被爆当時市役所職員をしており、市役所で被爆。8月10日調査のため爆心地入りする。被爆体験は、ずっと語ってこなかったが、77歳の時に息子の勧めで、救済事業に携わった官公庁職員の体験ということで新聞やテレビ取材をうけた。現在施設入居中。

2. 長崎原爆被爆高齢者が体験を語る意味

A氏とB氏の語りから表出された原爆被爆体験を語る意味は、【社会情勢への危機感】【愛と平和の希求】【次世代への伝承役割の自覚】【逃れられない被爆時の記憶を踏まえた語りによる自らの人生への意味づけ】の4つのカテゴリから形成された。

以下それぞれのカテゴリごとに特徴的な語りの内容の一部を紹介する。

1) 【社会情勢への危機感】

【社会情勢への危機感】に関連する特徴的な語りは、「ここ数年コロナの感染拡大で人と人とのつながりが希薄になっている。戦争もそうだし、新聞やニュースで絶えない事件もほとんどが人との関係がなくなっていくことによって起こっている（A氏）」「戦争だけじゃない、この世の中は苦しみに満ちている。もっと本当の幸福についてみんなが考えなくてはならないのに、金や名誉にしがみついて誰もそれをしようとしな（A氏）」

「核兵器は絶対に使っていけない物だ。やめなさい！って、いくら言ってもみんな自分の利益を正義にして（理由をつけ）、話し合いで解決できないところまで来ている。原爆が落ちたらもう終わりですね。落とした国も滅びます。でも、それが起こるのは、明日かもしれないんです（A氏）」、「平和、平和っていても、それぞれの価値観があるからね。自分のことが大事ですからね。だれでも（B氏）」などであった。

2) 【愛と平和の希求】

【愛と平和の希求】に関連する特徴的な語りは、「確かに平和運動とは続けられないといけない。もう二度とこんな原爆があってははいけません。でも、その根本にある、愛がないといくら平和、平和って言っても、運動をしてもダメなんです（A氏）」「愛とかっていうと、あんたはキリスト教だから、そういうんだと笑う人が多いけど、人とのつながりは愛がないとうまくいかないんです（A氏）」「色々な問題や戦争が起こるのも、結局は、関係性の問題、愛がないからだけど、それをみんなわからないんだろうね（A氏）」「私に残された時間は、あと少しだろうけど、どうか、私が死んだ先も幸せな世の中であることを願わずにはいられない。孫や子どもが私のような思いをせずに、どうかそんな世界であってほしいと思っている（A氏）」「自分のことばかり考えてたら駄目なんです。自分には関係ないじゃなくて、次の人たちの事も考えて、平和な世の中を考えて…だから、私は、この（原爆）の話をしよと思った（B氏）」などであった。

3) 【次世代への伝承役割の自覚】

【次世代への伝承役割の自覚】に関連する特徴的な語りは、「私が高校2年の時だったか、原爆記念日で坊様が説教されたんです。その中に『8月9日に、私がa病院の庭の奥を通ったら、桜の木の下で小さな少年がおなかの割れた弟を抱っこして、一生懸命、一生懸命、『頑張れ、頑張れ』と言っていた。今でも涙があふれます」と説教したんです。その時に、『ああ、俺のことを知ってる人がいたんだ』と。その話を自分で聞いたのがきっかけです。少しでも原爆のことを話すようになったのは。わかってもら

えなくてもこの体験は次に伝えないと…と（A氏）」「被爆者がどんどん高齢化してきて、色んなところで、被爆体験を伝えましょうっていう平和活動があっているけど、なんか美化されるっていうか、パフォーマンスっていうか。やっぱり、あの時の体験はそんな生易しいもんじゃないっていうのもあって。ああ、苦しくてもそれを体験した人が伝えないといけないんだなという思いがある（A氏）」「親が子どもに伝えるように、教師や生徒に伝えるように、それを伝えていかないといけないのかなという思いはある。私が教師だったからよけいそう思うのかもしれないね（A氏）」

「私はこういうのはね、絶対人には話さん…そういう気持ちでおったんですけどね。それは大いに間違ってるっていうこと分かった訳ですよ。だから、私から聞いたこと、私と話したこと、あなたがまた他の人に話す、大いにそういうのを伝播して行ってね、原爆っちゅうのは、こういうふうに恐ろしいもんだっていうことをね。皆さんが全部知ることが、それが必要だと思いますね（B氏）」「私はね、（以前ある人から言われたことが）身に沁みましてね。『あなた、（当時主役所において、被爆後の）そういう調査をして、体験したんだからね、その結果をね、報告して、公表するちゅうとはね、あなたの義務であり責任だ』と、そういうふうと言われて私もね、それが本当だと、そうだと私も自覚したんですよ（B氏）」「実はね、息子からね、あなたたちがお話を伺いたいと言われたときね、私がそうすることが義務だ責任だちゅうことをね、認識してなかったら恐らく私もね隠し通した。嫌だと言ってたでしょうね。ほんとこういう話ってね、好き好んでされるもんじゃないんですよ（B氏）」「殆どの方がもう死ぬまで語らない。思い出したくないし、あと言葉にしたら嘘っぽくって語れないんだと思う。語れないし語りたくないし。思い出したくないし（B氏）」などであった。

4)【逃れられない被爆時の記憶を踏まえた語りによる自らの人生への意味づけ】

【逃れられない被爆時の記憶を踏まえた語りによる自らの人生への意味づけ】に関連する特徴的な語りは、「自分のことを分かってくれる人が

いる。それは体験を話す中でとても大切です。聴いてくれる人がいるから話せる。話している中でも、ああ、こうだから自分は生かされて来たんだなって自分の人生の意味を考える（A氏）」「ほんとに辛い体験なんだけどね。辛いと言ってもわかってもらえない体験なんだけど、死んだ弟のことを話すと、弟が自分の前に、『兄ちゃん』って現れてくる。ああ、弟はああやって死んだけど、自分が生かされてきたことにはどんな意味があったんだろうって、何十年もたって私もこんな年になったから改めて考えるんだろうな（A氏）」「私にね、『水を。水を』って言うてからね、私にすがってくる人がおったんですよ。それがね、もう洋服はね、ぼろをこう下げてる。ぼろを被ってるような状態ですね。破れたやつをね。その下の肌の皮が剥げたやつが、ぶら下がってるのが見えたんですわ。もうね、びっくりしてね。私にね、すがってきたときには、私はね、ほんと地獄ってこういうところだろうか…と思った。いかにもね、こう、私に抱き着いてきそうな様子で。もう、恐ろしくてね。もう、とにかく、『私達は、なんにも持ちません』て、『ひとつ堪忍してください。堪忍してください』て、言うてからね。水ないものですからね。その人から逃げたんですよ。（中略）しゃべらなくても、ずっと心の中にはあの時のことがある。それを語ることに意味がある。つまり、義務だと思っている。この年まで生きたものにはその責任があるってことでしょうか（B氏）」などであった。

V. 考察

長崎原爆被爆高齢者が被爆体験を語る意味は、【社会情勢への危機感】【愛と平和の希求】【次世代への伝承役割の自覚】【逃れられない被爆時の記憶を踏まえた語りによる自らの人生への意味づけ】であった。

長崎原爆被爆高齢者は、戦争や犯罪、自殺といった現代社会が抱える様々な問題に対し、【社会情勢への危機感】を覚え、その状況を生み出しているのは人と人の関係性の欠如が理由であり、平和だけ追い求めても駄目だと考え【愛と平和の希求】をしていた。そして、被曝体験をしたからこそ語れるのだ、伝えることは義務だという【次世代への伝承役割の自覚】

や、自らの被爆体験は逃れられない記憶であることを踏まえ、語ることで、語りを聴いてもらうこと、自分の体験を分かってもらえることによって【逃れられない被爆時の記憶を踏まえた語りによる自らの人生への意味づけ】をすることが被爆体験を語る意味の構造である。

被爆から78年を迎え、被爆者の高齢化が進む中、被爆を実際に体験した高齢者の語りは、被爆体験の伝達・継承という視点で位置づけられている。つまり、原爆に被爆した体験は、戦後の日本社会のなかで、『反核・平和』理念と結び付けられながら記憶されてきた⁴⁾のである。被爆高齢者も、被爆体験を語る意味を【次世代への伝承役割の自覚】と伝達・伝承の意味があると捉えていた。しかし、このように被爆体験の語りを自他ともに伝達・伝承と位置付けることこそが、これまで被爆体験を語らなかった（あるいは、語れなかった）理由に結びついているのではないだろうか。なぜなら、「語ることは他者（あるいはオーディエンス）の存在を想定した相互行為的な営みである。（中略）他者が存在しなければ、そもそも語るという行為は成立しない。そして、そのような他者の存在を想定して語ることは、自己（self）あるいはアイデンティティ（identity）を構築する営みでもある」⁵⁾からである。しかし、辛い被爆体験を語っても、他者にはわかってもらえないという思いが、語ることを躊躇する原因となり、語りの意味を自らが構築する妨げとなるからである。語らなければ、意味を見いだすことはできない。また、体験を語る一聴くということが相互行為的であるということは、コミュニケーションをとるということである。語り手の語りを促し、語り手が語りに意味を見いだすためには援助としてのコミュニケーションが必要である。援助的コミュニケーションとは、情報の収集や伝達を目的とするのではなく、コミュニケーションをとることそのことで相手の苦しみを和らげ、満足・安心・信頼を得るコミュニケーションのことで、目的は情報ではなく援助である⁶⁾。

また【逃れられない被爆時の記憶を踏まえた語りによる自らの人生への意味づけ】も高齢被爆者が被爆体験を語る意味であった。高橋は、ある個人が本当に思ってきたことを語り終えて、それが真摯に聞かれたとき、人はど

こか自分の人生そのものがねぎらわれた感覚を持つのではないだろうか⁷⁾と述べている。A氏が語った「自分のことを分かってくれる人がいる。それは体験を話す中でとても大切です。聴いてくれる人がいるから話せる。話している中でも、ああ、こうだから自分は生かされて来たんだなって自分の人生の意味を考える」も、語ることで、自己またはアイデンティティの構築とかかわってくる点である。つまり、自分の過去の経験（出来事）を、意味あるものとしてそれぞれを相互に関連づけ、そしてそれらの経験を時間的に一定の順序をもって配列すること（時間的構造化）によって、自己やアイデンティティの統一性や一貫性を感じる事が可能になる⁸⁾のである。

VI. 引用文献

- 1) 厚生労働省：被爆者数・平均年齢，
https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage_26531.html（参照 2024-1-5）
- 2) 植田正浩，鷺田清一（2000）. まなざしの記憶－だれかの傍らで，TBSブリタニカ，142，東京.
- 3) Berelson, B.（著），稲葉三千男，金圭煥（訳）（1957）. 内容分析，48-70，みすず書房，東京.
- 4) 石田忠：反原爆（1973）. 長崎被爆者の生活史，未来社，東京.
- 5) 藤本愉（2003）. 語り研究における「共同性」の検討，北海道大学大学院教育学研究科紀要，90，43-69.
- 6) 村田久行編著（2023）：苦しみを和らげる認知症ケア，115，川島書店，東京.
- 7) 高橋在也（2014）. 人間にとっての〈語り〉の根源性－年を重ねた者と〈語り〉の場の生成－，総合人間学，8，251-289.
- 8) 同掲 7)

本報告書は、長崎原爆被爆者 A氏が被爆体験を語る意味、長崎県立大学看護栄養学部紀要第22，71-22，2024.3に加筆・修正を加えたものである。